
黙示録～あるいは福音～

豆狸

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

黙示録〜あるいは福音〜

【Nコード】

N4328G

【作者名】

豆狸

【あらすじ】

聖ルキア教会の神父・秋彦と居候の累はある日ミサにやってきた少女の告解を聞く。——勝利の上の勝利を導く騎士を見た。と活字中毒者の神父と無神論を振りかざす教会居候が繰り広げるホラーもどき。

プロローグ

ヨハネ黙示録・・・新約聖書の最後に位置する記述であり、新約聖書の中で唯一預言書である。

ヨハネの黙示録は、ヨハネによる黙示録・神学者聖イオアンの黙示録ともされ、福音派の一部には、イエス・キリストの黙示と呼ばれることもある。

が、その解釈をめぐって正典とすべきか否かの論議が起こっている書でもある。

神様なんているのかしら？

いたのならば、どうして私を、私たちを助けてくれなかったの？

何も悪いことなんてしていないのに・・・

ああ、ドウシテ――。

――わたしのためにののしられ、迫害され、ありもしないことで悪く言われるとき、あなたがたはさいわいである

喜びなさい。喜び踊りなさい。天におけるあなたがたの報いは大きい。

あなたがたの前の予言者達も、同じように迫害されたのである…

ゴシック様式の古い祈りの場。

年若い病的な癖をもつ神父のよく通る声が聖書をたどる。

――あんたが回した歯車だ。目的を終えるまで止まらない。

何を願ったんだよ？

無気力かつ、教会居候なのに無神論を振りかざす少年の鋭い声。

——私を、助けてください

悲鳴のような告解をする少女。

——神なんてこの世にいるわけがない。

第二話　告解の少女

「秋彦ー！」

荘厳な教会に響く少年の絶叫。

少年の機嫌が悪いというわけではない。声を張り上げないと、教会の主と言うべき年若い神父は気がつかないのだ。

「早く来ないと朝飯抜きにするぞコラ！」

ガンガンと神父の自室のドアをたたきながらけんか腰で叫ぶ。

幾度かドアをたたくが無反応。

もう一度声をかけようと息を吸った瞬間、目の前のドアがガチャリと開いて、黒衣の青年が現れた。

「遅い」

「すみません」

少年・明原累あきはるいがびしりと指を突き付けてわめくと、神父・九法秋彦くのりあきひこは素直に謝罪の言葉を口にする。謝罪をしても、秋彦の生活態度がまったく変わる兆しを見せないことをいやでも知っている累は通算幾度目になるか忘れたため息を吐いた。

ついでと言わんばかりにまだドアが開いたままの部屋を覗くと、予想通り大量の本で山ができている。一応整頓はされているのだろうが、いかんせん本が多すぎて繁雑とした印象しか与えない。

「まったく、図書館でも作る気かよ。いつか床が抜けるぞ」

「その時はその時ですよ」

ノホホンとした言葉をのたまった同居人を睨みつけて、ドアを閉める。

「朝飯、早くしないと冷める」

「ああ、そうですね。じゃあ行きましょう」

のんびりとした若神父に頭をこっそり抱えながらも、累は秋彦の服の裾をつかんでダイニングへと引っ張った。

聖ルキア教会――。

古の聖女の名を冠したゴシック様式の教会。全石造りという、今の時代としては珍しい教会には、これまた珍しい19歳の青年が神父として就任していた。

奥にある住居スペースではなく、礼拝堂の信者たちが座る長椅子に腰かけて古書を読んでいた秋彦はカタン、というかすかな物音に気がついて、振り返る。

音がしたのは、小さな箱を思わせる木で出来た小屋・・・懺悔室だ。（お客さんとは、珍しいですね）
信者の数は多いが、懺悔室の利用頻度はさして高くない。

珍しいこともあるものだと、思いながらゆっくりと懺悔室の戸を開いた。

「神父様・・・」

「どう、なさいましたか？」

声からしてまだ少女だ。が、声に聞き覚えがないから信者の誰かというわけでもない。

精緻な細工が施してある仕切りが少女と秋彦を隔てているので、詳しいことはわからないが、16、7といったところか。
軽くうつむく顔を隠している髪はうすい茶色。

（いや、薄茶というより琥珀・・・か？）

この国ではあまり見ない髪の色だ。

「・・・わたし、見てしまったんです」

蚊が鳴くようなかすかな声。

あわてて少女の話に耳を傾ける。

「何を見てしまったのですか？」

少女が口を開き、また沈黙する前に、穏やかに続きを促す。

自分で勝手にしゃべってくれることもあるが、往々にして自分の罪を神に暴露するのだから、告解に来る人の口は重い。

下手をすれば1時間、それいじょう何もしゃべってくれないことがある。

そうなる前に、先を促す。

懺悔をするために教会に走ってきたのだ。どんなモノを見てしまったのだろう。

殺人現場か、強盗、はたまた強姦か……。

少々物騒な考えを巡らせるが、その予想はすべて外れた。

「……勝利の上に、さらなる勝利をもたらす騎士を……」

「え？」

いったいどういう意味だと問いかけようとしたが、その一言を口に出すと、少女は電池の切れた人形のようにひたすら沈黙し続けた――。

「秋彦！」

「なんですか？ 累」

「なんですか？ ……お前の方がどうしたんだよ。急に部屋の中ひっくり返し始めて」

部屋の中にもった同居人を心配したのか、累はノックもなしに秋彦の部屋に滑り込み、アンティーク調の椅子に行儀悪く陣取った。

「……すこし、気になることが」

言葉少なに秋彦がそう言うと、累は目を細める。

「今日、懺悔にきた女の子か？」

「見ていたんですか」

「ちらつとな。どんな内容だったんだよ」

「それはいえません」

「いまさらだろうが」

神父には、一応事件性がないかぎり、告解の内容は第三者には明かすことはできないのだが、類には関係がないらしい。

小さくため息をつく、秋彦は仕方がないというように開いたままだった洋書を閉じる。

この少年に、神の教えを説いても無駄だと長年の同居生活でいやと

いうほどわかっている。

「黙示録。第六章四節」

断片的な言葉だけをヒントとして与えてやる。

敏い同居人のことだから、一から十まで言わずとも一言でわかるだろう。

その証拠に答えに思い至ったのか、嫌そうに顔をしかめている。

「ヨハネの黙示録、支配の騎士」

「ええ、相変わらずよくご存じですね。今日来た方は“支配の上にさらなる支配をもたらす騎士”と一言おっしゃっただけですが、おそらくヨハネの黙示録でしょう」

厄介な・・・と言外に秋彦はこぼす。

あの少女はその気はなかっただろうが、この問題は非常に厄介だ。

「無視しちまえばいいじゃねえか」

「・・・そうしたいのはやまやまですがね」

先ほど閉じた洋書をまた開いて、栞のように挟んでいた新聞の切り抜きを累の目の前に突き出す。

「なにこれ」

「どうやら、これに関連があるみたいですよ。あの方の告解は」

新聞の切り抜きは、数十年前の集団自殺の記事だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4328g/>

黙示録～あるいは福音～

2010年10月9日06時57分発行